

特集 「日本語が拓く多様なキャリア形成」について

175号特集ワーキンググループ

小森由里（代表）、建石始、野山広

【本特集号の趣旨】

今回の特集号のテーマは、「日本語が拓く多様なキャリア形成」といたしました。本特集は、日本語教育学会の理念体系の社会的研究課題3「多様なキャリア形成のための日本語教育内容の体系的再編成」にもとづき、日本語との関わりによって、さまざまな人々がキャリアをどのように切り拓いていくか論じることを目的とします。日本語をめぐる昨今の社会情勢から、母語や国籍を問わず、多様な社会文化的背景をもつ日本語使用者が、日本語によって生涯にわたるキャリアを形成し未来を拓いていく可能性を考えることが求められています。そこで本特集では、多言語・多文化背景の年少者、国際結婚により日本で生活する外国人、外国人介護・看護労働者、外国人留学生、海外の日本語学習者など主体を幅広く捉え、そのキャリア形成の事例、現場における課題と提言、キャリア形成のための支援、教育、政策などについて取り上げたいと思います。

【本特集号の内容】

本特集号では、以下の5本の寄稿論文と1本の投稿論文を掲載いたします。

- ・多言語・多文化背景の年少者のキャリア形成—キャリアデザインの視点から—
(山田泉氏：寄稿論文)
- ・国際結婚移住女性の日本語とキャリア—リテラシーの補償と保障に向けて—
(新矢麻紀子氏：寄稿論文)
- ・外国人介護・看護労働者のキャリア形成（布尾勝一郎氏・平井辰也氏：寄稿論文）
- ・外国人留学生のキャリア形成—インターンシップ参加の実態調査と事例から—
(横須賀柳子氏：寄稿論文)
- ・海外の日本語学習者のキャリア形成—世界市民の育成のために—
(福島青史氏：寄稿論文)
- ・日本語教育で扱うべき語の選定のための医学用語と一般語のはざまの語彙の分析
(山元一晃氏・稲田朋晃氏・品川なぎさ氏：投稿論文)

山田論文では、キャリアを「人の生涯」、キャリアデザインを「人生の設計」と捉え、人が人生を設計するためには、自分とは何かというアイデンティティを追求することが必要だと述べています。人は孤立した存在ではなく、過去から現在に続く肉親や現時点での人的ネットワークなど、さまざまな人々の人生と繋がりのあるものだとして認識することが重要だということです。しかしながら、外国につながる子どもたちは、日本社会の同化圧力、自分隠しによって、人々とのつながりを実感することが難しい状況にあります。このような子どもたちのキャリアデザインのためには、母語や継承語を学ばせ、また、その学習を

支援するシステムの整備が必要であると提言しています。

新矢論文では、日本人男性との国際結婚によって日本で生活する女性3名の事例を取り上げています。女性3名を対象とした生活史や日本語学習環境に関わる聞き取り調査、職場における参与観察、地域社会の人々への聞き取り調査などを実施し、仕事に関わるワークキャリアと私生活に関わるライフキャリアの2つの観点から女性たちのキャリア形成を分析しています。その結果、日本語が十分ではなくても、女性たちが日本語を活用したり日本語に代わるものを資源化したりすることで、地域社会の中で自分の位置を確保し役割を見出していることを明らかにしています。さらに、「生活者としての外国人」が豊かな生活を送り社会に貢献できる可能性があることを示唆し、地域社会によるリテラシーの「補償」および公的な日本語学習の「保障」が必要であると主張しています。

布尾・平井論文では、外国人介護労働者・看護労働者の受け入れ制度の枠組みや在留資格について言及した上で、インドネシア人の元EPA介護福祉士候補者および看護師候補者8名に対して行ったインタビュー調査の結果を紹介しています。さまざまな属性・背景をもつ8名に、EPAに参加した理由、日本で大変だったこと、今後のキャリアパスなどについて質問し、国家試験に合格したことが必ずしもキャリア形成にはつながっていないという問題点や、結婚や子どもの教育、両親の問題がキャリアパスの選択に影響を与えているという実態を明らかにしています。このような課題は、元EPA候補者に限らず外国人介護・看護労働者全般にも当てはまるとし、改善のための提言を行っています。

横須賀論文では、キャリアを単に職業や職務に従事することではなく、自分らしい生き方を見出していく過程とみなしています。このようにキャリアを人間発達の視座から広義に捉え、外国人留学生在がインターンシップへの参加を通して、どのようにキャリアを形成するか論じています。インターンシップ全般を概説したうえで、私立大学に在籍する留学生11名を対象に半構造化インタビュー調査を実施し、また、パーソナルドキュメントを質的に分析し、留学生在がインターンシップに参加した目的および、その実践と効果を詳述しています。複数の事例を取り上げることで、ビジネスの現場で留学生在が多様な他者と関わり合い、ことばや文化を学び、将来の自分の生き方を探求する実態を明らかにしています。

福島論文では、キャリア形成という視点から海外の日本語学習者を捉えています。留学、駐在、移住など、世界的に人々が移動する時代において、「日本と海外」を対立するものではなく、連続性のある世界として認識する必要があり、海外の日本語教育は、外国語としての日本語を学ぶ外国人成人に限らず、世界で生きる人を対象にすると述べています。キャリア形成を、他者とのかかわりの中で生涯を通して自らの役割や価値を選び「自分らしさ」を創造することとみなすと、日本語教育は単なる言語形式の習得だけではなく、「自分らしさ」の生成の場ともなります。海外の日本語教育においては、世界を捉える視点を内在することが必要であり、ことばにより世界と関わり世界を作る「世界市民」を育成するために、複言語教育としての日本語教育が必要であると主張しています。

山元・稲田・品川論文では、医師を目指す留学生在を対象とした日本語教育に焦点をあて、医師国家試験に特徴的にみられる語を分析しています。医師国家試験に特徴的な語の中には、専門用語辞典に掲載されていない語があり、その中には一般的な日本語教育で扱われ

ない語が含まれています。そのような語を医学用語と一般用語とのはざまの語彙と位置づけ、その様相を明らかにしています。はざまの語彙の中で頻度の高い68語を取り上げ、「身体の部位や位置を表す語」「患者の状態を表す語」など用例を示しながら8つに分類できることを指摘しています。さらに、医療分野以外では用いられないと考えられる隠れた専門語の存在を示し、試験に備えて、専門家と協働して指導方法を検討する必要があると述べています。

キャリアと一口に言っても、さまざま観点から捉えることができます。本特集で掲載した論文においては、キャリアを、職業、自分らしい生き方を見出していく過程、自分らしさを創造すること、人の生涯、さらにワークキャリアとライフキャリアを包括したものとそれぞれに定義しています。6本の論文では、キャリアを多面的に捉えた上で、異なる状況で多様な背景をもつ人々が日本語によってキャリアを形成している実態、また、キャリアを形成する上での問題点を明らかにし、それを改善するための提言がなされています。日本語は、日本社会ではキャリアを形成する人々にとって必要不可欠なことばであると同時に、グローバル社会においてはコミュニケーションの手段としてだけでなく、言語アウェアネスの対象にもなります。今回の特集が、多様なキャリア形成につながる日本語教育の意義および在り方を考える一助になると幸いです。